

尾道草紙 13

尾道市立大学 創作民話の会

尾道草紙 13



手紡ぎ

飴買い幽霊・後日談

浄土寺の願掛け石

腰掛岩のおじいさん

ブライト・マリン・ブルー

かんざし灯籠伝説

玲瓏として

尾道市立大学 創作民話の会

税込 500 円

尾道草紙 13

尾道市立大学 創作民話の会

はじめに

日本文学学科 教授
光原 百合

尾道市立大学創作民話の会発行、『尾道草紙13』をお届けします。本書は尾道市立大学芸術文化学部日本文学科と美術学科の共同制作作品集です。日本文学科の学生たちが綴る物語と、美術学科の学生たちが描くイラストからできています。

創刊当時から変わらないテーマは、「尾道の魅力を自分の目で見つけ、それを輝かせるような物語を作る」こと。今年も、かんざし灯籠や丹花の飴買い幽霊のような昔話から発想した物語、千光寺公園の展望台や宝土寺の手しごと市のような現代の出来事を背景にした物語など、時代を越えた尾道のさまざまな顔を描く物語が揃いました。本書を片手に尾道を散策していただき、それぞれの物語の舞台を確かめたり、ご自分の物語を見つけたりしていただければ、これほど嬉しいことはありません。

本書収録作品が、末永く尾道の街に根付くことを祈りつつ――。

表紙
立体・船津 さくら
撮影・高岡 波留希
装幀・奥村 菜々実

もくじ

| | | | |
|----|----------------------------|--------|----------|
| 02 | はじめに | | |
| 07 | 手紡ぎ | 飯田 菜都紀 | 絵・三國 綾華 |
| 17 | 飴買い幽霊・後日談 | 谷口 萌花 | 絵・三石 京佳 |
| 25 | 浄土寺の願掛け石 | 光原 百合 | 絵・伊藤 敏治 |
| 33 | 腰掛岩のおじいさん | 藤村 ふゆか | 絵・沖村 明日香 |
| 43 | ブライト・マリン・ブルー | 森田 彩音 | 絵・小藤 由愛 |
| 53 | かんざし灯籠伝説 | 森山 美琴 | 絵・上杉 理紗 |
| 63 | 玲瓏 <small>れいろう</small> として | 森川 泰樹 | 絵・小西 美幸 |
| 79 | 創作民話マップ | | 絵・有岡 穂香 |
| 82 | 執筆後記・他 | | |

手紡ぎ

手紡ぎ

飯田 菜都紀

絵…三國 綾華

ここ宝土寺では年に二度、さまざまな手作り品が売られる手しごと市が開催されている。

賑やかなテントの群れのすぐ近くに、ひっそりと小屋が建っていた。近くの掲示板には、手書きの文字で「あなたの時間、紡ぎます」。日付は今日。糸紡ぎの体験をやっているらしい。

可愛い小物や境内の桜の花に、はしやぎつかれてしまったのもあって、興味の向くまま近寄って

みる。ほんの少ししか離れてないのに、活気がすつと遠くなった。

扉は開きっぱなしになっていて、上部に丸いステンドグラスがはまっていた。鈴をくわえたツバメだ。

入口に立って、首だけ伸ばして、おそろおそろ小屋の中を覗いてみる。

奥の方で、女の人が紡ぎ車をまわしていた。お

とき話にでも出てきそうな、足踏み式の大きなやつだ。軽快に車が回り、一定のリズムで足がペダルをこぐ。

初めて見た見たその様子が面白くて、つい窓の外からじいっと見つめていると、女の人がふいに私に気が付いた。一度、紡ぐのをやめて、にっこり笑って、私においでと手招きをする。

優しい気なその様子に甘えて、小屋の中へと入ると、女の方は手紡ぎ車のすぐ横に置いてある椅子をすすめてくれた。私が座ると、女の方は、また紡ぎ車をまわしだした。

「紡がれて糸は初めて糸になるのさ」

そう言われて私はじつと女の人の手元を見つめた。淡く濃くいろんな色が混ざり合った毛のかたまりは綿菓子みたいにふわふわで平べったくて、先つぼが、もやのように薄かった。細い糸が一本だけぴんと伸びて、よりをかけられながら、ツムに巻き付いている。



「あんたもやってみる？」

「いいんですか？」

「もちろんだよ」

女の人はちょっと待っててと言つて、立ち上がった。机の引き出しから真っ白なかたまりを一つ取り出して持つてくる。ふわふわで小さくて両手に収まつてしまうサイズ。手慣れた様子でツウと引き出し、軸が長いコマみたいな道具にセットして私に手渡した。道具はスピンドルというらしい。

教えられるままに、そうつと紡いでいく。長い軸を回すことで、塊から引き出された白いもやがよりをかけられ、糸になる。不思議なことに、ふわふわ白かったはずの塊が、だんだんと染まつていく。淡いピンクと緑のグラデーション。

私はそれをごく当然のことに受け止めた。ただきれいだと見とれるばかりで、不思議だとはちつとも思わなかった。

CLOSEDの看板がかかっている。扉の横の窓から小屋の中を覗いてみる。室内はひっそりしていて、人の気配なんてかけらもなかった。まるで最初から、ここには誰もいませんでしたよ、と言わんばかりの静けさだった。

たつぷり秒針が一周するくらいには呆気にとられていた気がする。その後も、少しの間だけ小屋を離れては、何度も窓を覗いてみた。だけど女の人はとうとういないままだった。どうやら、夢だったんだと思うしかないらしい。

道路のすぐそばにある階段を上った先に踏切が一つ。その奥に続いている階段をさらに上つて、やつとつく。坂の上のお寺に行くために階段を上らなきゃいけないところまではよくあるけれど、階段と階段の間に踏切を挟んでいるのは、あんまりない。それに、この踏切、一回引つかかったら待ち時間がやたら長い。

「紡ぎ手の時間をもらつて綿は糸になる。どんなに綿が糸になりたがつても、綿は自分から糸になることはできないからね。この綿たちは、紡ぎ手の時間を借りて自分を変身させたのさ」

ちよつともつたいぶつた感じで女の人が言う。

「紡がれた糸たちは、あなたの時間に染まつたんだ。ちよつとした感謝のしるしだよ」

そうだ、と女の人が笑う。

「この糸をもつと変身させてやろう。最後の仕上げをするのに預かつておくから、近いうちに取りにおいで」

私はこくりとうなずいて小屋を出た。あのきれいな糸がどんなふうに変身するのか、楽しみな気持ちでいっぱいだった。

あ、いつごろ取りに行けばいいか聞くの忘れた。慌てて後ろを振り返ると、小屋の扉には、あつたはずのステンドグラスがなくなっていた。ただの茶色一色になつていて、いつの間によら

電車が通り過ぎるのを待ちながら、ぼやあつとして黄色と黒の通せん棒を見る。カンカンカンカン鳴るわりに、電車はちつともやつて来ない。早く手しごと市に行きたいんだけどな。思わず

漏れたあくびのせいで、目が潤む。にじんだ景色の端で、何かが揺らいた気がした。パチパチ瞬きをしてクリアになった視界で、踏切の向こうをじつと見た。どこが変わつたとも思えない。気のせいだったみたい。

カンカンとどこか間延びした音がして、急に通せん棒が上がっていく。

はて？ 結局来なかった電車に首をかしげながら、階段を上った。急勾配で少し危なつかしいけれど、坂の上から見下ろす眺めはいい。珍しく車が行き通っていない街は、見慣れているはずなのに、まるで知らない場所に来たみたいだった。

お寺の門をくぐつて、足が止まった。あれえつて思いながらあたりを見渡す。桜の木があつて、



お地藏さんがあって、斜め右に本堂があって。それだけだった。お店のテントも何もない。どうやら日付を間違えていたらしかった。

確か今週だと思ってたんだけど。日付の確認がてらケータイを取り出す。

写真に保存していた手しごと市のポスターの写真の日付は二十三日。ケータイの日付も二十三日。確かに今日だった。おっかしいな。急な変更でもあったんだろうか。首をかしげながらも、ゆつくりと歩きだす。このまま帰るのもなんだし、とりあえず参拝でもしようか。

意外と境内は広がった。ガランとした中、やけに一つ一つの建物が大きく見える。お賽銭箱にお賽銭を入れて、ぎゅっと目をつぶった。合わせた手のひらに力を籠める。なにか面白いことが起きますように。むーんとうなった。全然変わった気がしない。やっぱダメかなあ。ちよつとだけ、そうちよつとだけ期待したんだけど。

ふと、何かの気配を感じた。後ろを振り向いても誰もいない。でも何かいたような。前に向き直って首を傾げた私の前を、チリンという音とともに、ひゅつと黒いなかかが横切った。つられて目を向けると、本堂の縁側にツバメがちょこんと止まっている。くちばしには鈴を一つくわえていた。ツバメが身じろぎするたびに、チリンチリンと音が鳴る。どうやら、さっき聞こえたのはこれだったらしい。

黒いツバメに銀の鈴は、とても映えるけれど、鈴はツバメがくわえるにしては少し大きいように見えた。けどとても可愛らしい。

もつとよく見たくなつて、驚かせないように少しずつ近寄っていく。縁側まであと四、五歩くらいのところまで接近したときに、ツバメが羽ばたいた。屋根の近くまで飛んだかと思うと、本堂の横の広い場所を渡っていく。手しごと市のテント群が建っていないだけで、どこか閑散として見え

るその場所を、ツバメは斜めに勢いよく滑空していった。

あの時の小屋の前でツバメは器用に方向転換し、軽く上昇して扉に突っ込んだ。ぶつかると思わず目をそらしたものの、ツバメがぶつかった音も鈴の音も聞こえない。

不思議に思つて、小屋の真正面まで歩いていつて立ち止まった。ツバメの姿はない。巢もないし、屋根やポストにとまっているわけでも、地面に落ちてはいるわけでもない。あるのは、扉にはまっているステンドグラスのツバメだけ。ああ、でも、このツバメ、前に見たことがあるような。

不意に頭の中を春の記憶が駆け巡つた。ここ宝土寺で毎年開かれる手しごと市。ずらりと並んだテントで、さまざまな手作り品が売られて賑わつてたつて。それで、たしか、そこから知らんふりしてゐるかに建つていた、あの小屋で私は。扉は薄く開いていて、どうやら鍵はかかつてい

ないらしかつた。少しためらつた後、入口に立つて、おそろおそろ小屋の中を覗き込む。

あつと口から小さな声が漏れた。窓辺のテーブルの上に、見覚えのある糸で編まれたシュシュがついていたのだ。やつぱり、あれは夢じゃなかつたんだ！

まじまじとシュシュを見つめる。レースのようなたつぷりしたフリルの上に、桜の花と葉っぱが散らしてある。花は白く、フリルはピンク、葉っぱとシュシュの縁は緑色。まるであの時に手しごと市で見たこの桜の木のようなつた。

あんまり可愛らしいものだから、窓辺まで歩いて行つて、シュシュに触つてみる。洗濯したガーゼのハンカチみたいに、くたつとしていて柔らかい。

シュシュの下に敷いてあつた紙が、不意にひらりと宙に舞つた。慌てて拾い上げて、カチンと体が固まつた。

手しごと市に来た無口なお嬢さんへ。仕上げはしたから早く持つていきなさいな。

やつぱり、これは私のだつたらしい。ありがとうと小さくつぶやいて、もう一度シュシュを取り上げる。髪につけるのもいいけれど、まだもう少し眺めていたくて、ブレスレット代わりに腕にはめた。

小屋を出たら、がやがやとした音が耳についた。さつきまではなかつたテントの群れと手作りの品々。思わず首をかしげて、今日の日付を思い出して、納得した。ああ、そうか。やつぱり今日が手しごと市の日だつたんだ。振り返ると、今出てきたばかりの小屋の中では、やつぱり手紡ぎ体験をやつていた。だけど、あの女の人はどこにもいない。賑やかさで満ちた小屋にインストラクター



の人とお客さん達の笑い声が響いている。さつきまでの静けさは、あつという間に消えていた。

ふふつと思わず、声が漏れた。どうやら無事に日常に戻ってきたらしい。

去年、女の人が言っていた言葉を思い出す。紡いだ時間に染まった糸は、ずっと待っていたのかも。私が忘れても、ただただあの小屋の中で待ち続けて。だからツバメは、あの非日常に私を誘ったんだろう。いい加減、思い出してやりなよって。手しごと市のお店で、ポストカードを一枚買った。あの小屋の横にあった掲示板に、引き取りましたよって手紙を張り付けておこう。届くかどうかはわからないけれど。 ㊦

飴
買
い
幽
霊
・
後
日
談



いまからちょうど一年前、我ら獅子四体が南門を司る、この福善寺で赤子が産まれた。しかし普通に産まれた赤子であれば、こうして語りはしない。何を隠そうこの赤子、墓で産まれたのだ。ある夜、丹花の小路にある飴屋の親父が門をくぐってやって来た。親父はしばらく境内を歩き回り、それから大声で和尚を呼んだ。
「……この前から女が毎晩飴を買いに来とった。

毎晩つちゅうのが気になってな、こうして後を付けて来た。その門をくぐるのははっきり見た。それからどこに行ったかと女を捜したが見当たらん。代わりに墓から赤子の声がする。和尚さん見てくれんか」

親父が言う通り、先日葬られた女の墓から赤子の声がした。もしかしたらと二人が墓を掘り返すと、元気な赤子が出てきたのだ。

和尚は「この墓は、先日ここに葬られた女の墓じゃ。産月が近かったけえ赤子は無事に産まれたんじゃ。それで母親が幽霊になって、お前さんとこの飴をやって育てとったんじゃろう」とか言うておったか。そう聞いて親父は落ち着いたようだった。赤子をあやしながら、

「うちには子どもがおらん。これも何かの縁じゃろう。な、和尚さん。わしにこの子を引き取らせてくれんかの」

ところが、飴屋に引き取られた赤子が毎晩のように夜泣きをするようになった。

静かな尾道の夜に泣き声はよく響く。我らは丹花小路のあたりを眺めながら顔を見合わせた。

「泣いとる」

「泣いとるな」

「母を恋しがつておるんじやろう」

「泣くのはええが、ここまで大声では」

話していると、正門の龍神さまがぬつと現れて、こう仰せられた。

「お前たち、あの赤子をあやしてこい。お前たちの姿はこう……もふもふとしとるではないか。赤子はそういうのが好きじやろう」

そんなの親父と女房がやるでしょう、さすがにそれは、我らは門に構えて寺をお護りせねば、獅子には威厳というものが……。

「やかましい。さあ行け」

ということ、赤子を泣き止ませに行くように



なつた。行くとたいいてい飴屋の親父か女房が飴をやつてあやしている。

初めはどうやつてあやそうかと戸惑つたが、猫の真似をするということに決まつた。そこらによくいる猫が人間に触れるさまを思い出し、前足やしつぽ、頭で触れたり、可愛らしく毛づくろいをして見せたりする。これのおかげかはよくわからないが、いろいろやつているうちに赤子は泣き止むのだ。

かれこれ一年間あやしてきたある日、赤子がひととき大きな声で泣いた。

「あの赤子も二歳になるといふに」

「向島まで聞こえておるのではないか」

「このままでは尾道中起きてしまう」

「すぐに行くぞ」

門を離れて、空を駆ける。飴屋めがけて一直線。着いてみると、思いもよらぬ光景が。

「なんで龍神さまがここに」

いつもの部屋に龍神さまがいらつしやる。しかも加持祈祷の道具やら舞の道具やらで賑やかな出で立ちである。

「どうしてそんな大荷物を……」

「あつ！ これ護摩の木札じゃないですか！

千光寺さんから持って来たんですか」

「警策……天寧寺さんのですか」

「借りてきた」ふふん、と胸を張っている。

「いろいろ混ざつとると思つたら……」

「二歳になるこ奴を祝つてやろうと思つてだな」龍神さまが御幣をばざりと一振りすると、赤子はいつそう声を上げて泣いた。

「怖がられて祝うどころではないようですが」

「うむ……」

祝いの道具を抱えた龍神さまが小さくなる。その間も泣き声は続く。産まれてから一年経ち、多少動けるようになっていゝ赤子は、布団を引つべがし、枕を投げ、殴るような動きをする。龍神さまに向かつて。どうやら、顔が怖い龍神さまを鬼か何かと勘違いして、退治しようとしているらしい。

「早く寝かしつけねば」

まずは、顔が怖い龍神さまに帰つていただくこう。

「龍神さま、わかつておられると思ひますが」

「うむ……」

顔が怖いというのを気にしているらしい。しゅるりとおとなしくお帰りになつた。

それから、とにかくこちらに気を向けさせるため四体で赤子にじゃれつく。するとそこに、飴を持った親父が入ってきた。いないと思えば、飴を取りに行っておったか。

「よおしよし。そら、お前の大好きな飴だぞう」

親父は慣れた手つきで赤子に飴を差し出す。口まで持っていくが、なかなか入らない。口回りがべとべとだ。うまく舐められなくて悲しいのか、またぐずりだす赤子。全く、仕方のない奴らめ。

赤子に頭を擦りつけたり涙を舐めとってやりたり、とにかくいろんなことをした。飴まみれになりながら、いつもより長い夜泣きに付き合っている。努力の甲斐あって、赤子はようやく機嫌を良くし、にこにここと笑うまでになった。そんな赤子を見てみんな安心していた。

「このままではまずい」と、赤子に頼ずりざれている一体が言った。「朝が来てしまう」

「そうだ」

い」と声が聞こえる。

「ありがとうございます！」

龍神さまの救いを受けた俺たちは、雲の隙間から射しこむ太陽の手を避けながら空を駆け、やつとこき門の手前まで来た。

「間に合ったな。本当に危なかったが」

「では、いつもの場所へ」

そして昼間の定位置、門の四隅に飛び乗った。その瞬間太陽が姿を現し、身動きが取れなくなった。待ってくれ。まだ後ろ足が宙に浮いたままなのだ。

しかし、一度昇った太陽は夜まで沈まない。今日一日はこのままで。一日だけ人に見られなければ良いのだ、頼む。

俺たちの祈りも虚しく、朝早くからお参りに来た男がいた。その顔が俺たちの方を向いて逸れない。首を傾げ傾げ、とうとう和尚のところへ言いに行った。

「随分長居してしまった」

にわかには焦りが広がる。日光を浴びると動けなくなってしまう。その前に何とか帰らねば。

「さあ、急ぐぞ」

赤子の腕の中にいた一体が身をねじって脱する。赤子は何かを察しているのか、寂し気な顔をしたものの、素直に見送ってくれた。

家を出ると、東はもう白み始めていた。

「間に合うか」

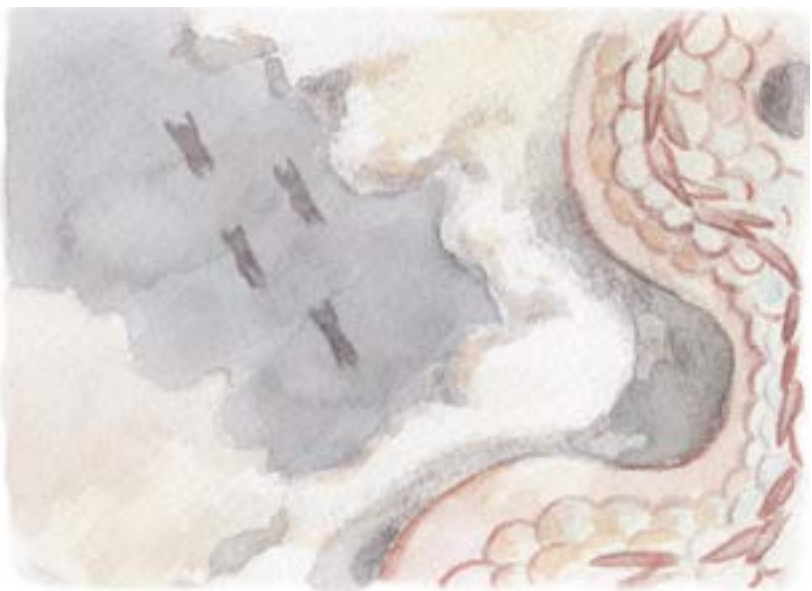
「いいから急ぐぞ」

木々の枝先が足先を掠める。時間があれば体中にこびりついた飴をどこかで拭いただろうが、そんな暇はない。とにかく今は門に帰ることだけだ。

門まであと半分というところで、ついに太陽が見えてきた。ここまでか、と諦めかけたその時、東の空に暗雲が立ち込めた。

「龍神さま！」

「わしが雲をかけてやる。今のうちに戻って来



「和尚さん、この獅子たちの格好が前と違うように思います」

「いや、いつもと同じ格好だがね」

えっ。

「はあ。……左様ですか」

男は尚不思議そうにしていたが、そのまま本堂の方へ行った。和尚は内心困惑でいつぱいの我らを見ながら、

「それにしても妙な格好をしている。天から降りて来たばかりのようだ」

にやりと笑って、本堂へ戻って行った。

かくしてこの「妙な格好」で覚えられてしまったので、赤子をあやした帰りの格好のまま居ることになったのだ。ちなみに、全身の飴はまだ拭えていない。■

浄土寺の願掛け石

浄土寺の願掛け石

光原百合

絵・伊藤敏治

よく晴れた春の日、日当たりのよい浄土寺の境内は、動いていると軽く汗ばむほど暖かかった。寺の街と呼ばれる尾道でも特に有名な古刹の一つだ。彼らにとっては子供のころから慣れ親しんだところだけだ。

久しぶりに集まったのは、おさななじみといつていい古い付き合いの仲間だ。この寺のある町内に実家があり、同じ最寄りの小学校・中学校、そ



のまま一番近くにある高校に進んだ。しかしさすがにその後は、地元の大学や遠くの大学、専門学校、あるいは就職と進路は分かれた。この春で大学組も卒業し、全員が社会人となった。そのうちの一人が長年の夢をかなえ、外国に行つてしばらくは戻らないこととなり、その前にと、連休に合わせて集まることにした。夕食は背伸びしてちよつと高い店を予約してあるが、それまで、子供のころよく遊んだ懐かしい場所を巡っている。

修験道の修行場だったと言われている、大岩に太い鎖を取り付けた場所では、

「コウジくん、ほんとに登る気？ やめときーや」「大丈夫じゃ。ここの鎖場なら小学生の時すいすい上ったつた」

「じゃけえ止めようるんよ。今はもう、小学校時代の身軽さはないんじゃけえ」

「落ちて怪我したら新聞に載るぞ。新社会人、羽目をはさず、ゆうて」

……でもコウジは結局一の鎖までは上つたのだ。その上の二の鎖や三の鎖は難関すぎて手に負えなかつたらしい。

鳴き竜の天井で有名な西郷寺本堂では、カナが勢いよく手をたたいてから、

「……確かに空気が震えるような音がしようるけど」

「この本堂に住み着いとる竜の鳴き声といわれとるんよね」

「竜の鳴き声ゆうてこんなかなあ」

「イメージと違うよな。龍の鳴き声ならぎよええええええ！とかな」

「コウジやかましい。……それは竜というよりゴジラじゃろう」

「恐竜、いうくらいじゃけえ竜の一種じゃ」

「ゴジラを恐竜に分類していいかどうかはまた別の……」

昼ご飯は高校時代によく行っていたお好み焼き

屋で、

「俺うどん入り」

「俺はそば」

「あたしはどっちも抜きで」

「カナ、ダイエツトか？」

「もう育ち盛りのような新陳代謝じゃないけえね。そんな炭水化物ばっかりいらん」

「あたしもそうしよう」

そんなふうにわいわいやりながら、昼下がりの浄土寺にやってきたのだった。

「願掛け石、懐かしいねえ」

シオリが本堂に上がる階段の脇を指した。そこにある台座に一抱えもある石の玉が載せてあって、願掛け石と呼ばれている。台座の表面は浅くくつてあって、玉はそこにはめ込んであるから、転がり落ちはしない。でも接着はしてなくて、石も台座もすべすべに磨いてあるので、横に回すことはできる。願い事を念じながらこの石を回し

たら、その願いが叶う。そんな言い伝えがそばに立った札に書かれていて、それで願掛け石と呼ばれるののだ。

「これ、回してみたよねえ。高校を卒業したあとの春休みじゃったかな」

「うん、やったやった。……なかなか回らんかったのお」

そう、この石、ものすごく重いのだ。それはまあ簡単に回ってしまっっては、「願いが叶う」というのが信憑性がなくなるだろう。六人全員が「ふぬおおおお」と変な声を出しながら試みているうちに、だんだんコツもわかってきて、最終的にはみな何とか回すことができた。

願掛け石を五人で囲んでぺたぺたと叩いてみる。

「誰かあの後、願い事が叶ったもんおるか」

ケンタの声に、誰の手も拳がらなかった。

「そんなもんか」

「そんなもんじゃろ」

「いやいや、ここは叶うことにしとかなと、せつかくの言い伝えが」

「……小泉八雲のこんな話、知っとるか」

ケンタが唐突な話題を出す。ケンタは大学で日本文学を専攻していた。

「昔、ある男の過ちが露見して、殿様の前で打ち首にされることになった。男は殿様に向かって『死んだら祟って恨みを晴らす』と叫んだ。殿様

は『それならば、首をはねられてからあそこの岩にかじりつくがいい。そこまでの執念を見せたら信じよう』と答えた。そのすぐ後、男は処刑された。すると恐ろしいことに、はねられた男の首は何メートルも宙を飛んで、殿様が指した岩にもものすごい形相でかじりついた」

「うわ、ちよつとグロ」

「まあ聞け。……家臣たちは男の執念を目の当た

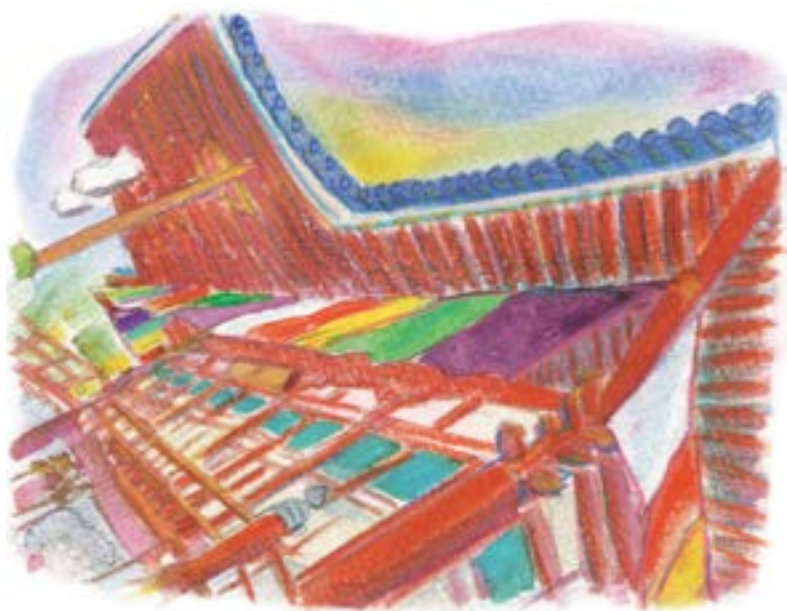


りにして、この後どんな祟りがあるかと恐れおののいた。ところが殿様は少しも心配している様子がない。とうとう一人の老家臣が、どうして心配なさらないのかと殿様に尋ねた。すると殿様は、『祟りなどないとわかつているからだ。死の直前、わしにああ言われたあの男は、首だけになって岩にかじりつくというののみを考え、それにすべての執念を使い果たしたのだ』と答えた。そして実際、家中ではその後、何の祟りもなかったって」

「面白い話だけど、それが？」

「実はこの話を聞いた時、この願掛け石のことを思い出したんじゃ。あのときなかなか回らんかったけえ、俺らの頭の中は願い事のことより、『この玉回れ〜！』ってののでいっぱいだったんじゃないか？」

残りの四人は一瞬だまり、それからわつと笑い出した。なーんじゃ、それなら玉が回ったところで願いは叶ったわけか。願い事の無駄遣いと



いか空振りというか？

ひとしきり笑った後、まあお参りくらいしようやということになり、みんなで本堂で手を合わせた。本堂から出てくると、

「あ、鳩！」

シオリが歓声をあげた。むかし海で遭難しそうになった足利尊氏を白鳩がこの寺まで案内し、その後尊氏はこの寺を厚遇したという言い伝えがある。そのせいもあるのか境内では鳩の群れがよく遊んでいて、餌をやるうとすると手や肩、頭にまで乗ってくる。シオリとカナ、コウジは鳩と遊びに駆け寄っていった。

ユウナとケンタはその場に残った。

「テツヤくんが乗ってくる電車、そろそろかねえ」

ユウナは山門のほうを眺めている。門のすぐ前に山陽本線の鉄道が通っているのだ。仲良し六人グループの残る一人テツヤは大阪に住んでいる。今日の朝どうしても外せない用事があったとやら

で夕方から合流することになっていた。テツヤが外国に行く前に集まろうということとで今日の集いが実現したのだから、いわば主賓なのだけれど。

「うん、そろそろじゃろうの」

「門の前に立つとつたらわかるじゃろうか」

ここにいることを知っていて、電車の中から本気で見たいればわかる距離ではある。

「……もしかしたら、あたしの願い事は叶ったんかもしれない。願掛け石回れ、なんてことじゃなくて」

「へえ？」

「あたしあの頃、テツヤくんのこと好きだったじゃろ」

あの頃、本人は必死で隠しているつもりだったらしいけれど周囲にはバレバレだったことを、ユウナはさらっと口にした。

「あのときは、この先テツヤくんの夢がきつと叶いますようにって、それだけ願ってた。自分のことで願い事なんか考えもせんかった。あんなふう

に人を好きになれるのは、若いころだけかもしれないねえ」

まだ二十二歳のくせに、ユウナは年寄りのようなことを言っていて笑った。

「だからテツヤくんの夢が叶ったのは、もしかしたらあたしのおかけかもしれないね。……よし、やっぱり門のところで見張っててやろつと」

ユウナは山門のほうに走っていった。

あの頃、といえば。ケンタは考えた。俺はユウナのこと、好きだったんだよな。全然振り向いてもらえなかったけど。

あのとき俺が願掛け石に願っていたのは、確か——ユウナがデートの誘いをオーケーしてくれませうように、だったと思う。……負けてるよな。勝てるわけないよな。

山門の前で線路のほうを見ているユウナの後ろ姿を見ながら、ケンタは鳩と戯れるケンジたちのほうに足を向けた。 ㊦



腰掛岩のおじいさん

腰掛岩のおじいさん

藤村ふゆか 絵：沖村明日香

「見て、昇！ うまくできた！」

図工の授業で折り鶴を作っていたとき、大吾は隣で苦戦している昇にできたばかりの折り鶴を見せた。昇は「いいな」といいながら、鶴を折っている。昇の机には、破れてしまった折り紙がすでに三枚ほどあった。今折っているものも、何度も折りなおされてよれよれになっている。昇は紙にしっかり折り目が付くように指を滑らせていた。

「ねえ、昇。あしたの天神さんのお祭り。一緒にいこう！」

手持ちぶさたになった大吾は、昇の破けた折り紙を丸めながらいった。

昇は、その言葉を待っていたのか、顔を上げ満面の笑みで「うん！」とうなずく。

そうして、授業の終わりに、昇はやっと一羽だけ上手く折ることができた。

下校時、大吾が昇と一緒に帰っていると、何か思い出したのか、昇が急に「あつ」と声をあげた。「大ちゃん、おれね。おかあさんにナフキン袋もくってもらった！」

かっこいいひこうきのやつ！

昇のおかあさんは、体を壊して入院中のため、会えないのだそうだ。これは、昇のおかあさんが病院でつくったものらしい。

「いいな！ ちょっと見せて！」

そういって、大吾は昇の袋をランドセルから外して、柄が見えるように両手でグイッと広げた。青地に白い飛行機が刺繍されたナフキン袋。右端には、『のぼる』と名前が縫われている。

「かっこいい！」

だろ！ と昇は嬉しそうに答えた。

大吾がナフキン袋を返す。昇が受け取って確認すると、大吾のつかんだ部分の形が崩れしわができていた。それを見た途端、昇は顔を真っ赤にし

て怒った。

「大ちゃんなんかもう知らない！」

怒った昇はそのまま走って行ってしまった。

天神さんのお祭りは、出店はもちろん福引や



大道芸も行われる。大吾はおばあちゃんを急かして祭りが始まる二時間前に足を運んでいた。日はまだ高い。照り付ける日差しに負けてしまい、大吾がおばあちゃんに「アイスは？」とねだったところ、一度天神さんから降りて海沿いにあるアイスクリーム屋さんに行くことになった。

しかし、

「あら、キヨコさん？ それに、大吾くんもお久しぶりね〜」

「アツコさん？ こんなところで会うなんてね〜」

階段を下りる途中、おばあちゃんの友達と出会い、その場で話し始めてしまった。

どこかで遊べないかな。

そう思っ、キヨロキヨロと周りを見回すと小路が目に入った。周囲におひさまが光って、そこだけ影が差し、奥が見えない。近づくと、小路の入り口に文字が彫られた石が建てられていた。

「おじいさんだれ？」
「ここ、座つちやいけないんだよとしめ縄を見ていった。」
「おぬし、字が読めるか？」
「すこしだけなら、読めるよ」
「ならば、あれはなんて書いてある？」
おじいさんは、右後ろにある碑石を指差し、大吾に言った。そこには、小路の入り口よりも新しい碑石があり、『菅公 腰掛岩』と彫られているが、大吾には「公」と「岩」しか読めなかった。他の字は分からないという、おじいさんは「そうか」と笑いながら、大吾の頭をなでていった。

「菅公、腰掛岩と読む。菅公とは、このわし菅原道真のこと。ここはわしの岩じゃよ」

ほれ、だからお座り。

こう、け、いわ、てん？

漢字はよくわからなかったが、どうやらこの小路の奥に、何かの岩があるらしい。階段しかないここよりはおもしろそうだ。おばあちゃんは友だちと話しており、少しくらいなら見にいってもいいだろう。

大吾は、おばあちゃんから離れて、小路のほうに向かった。

小路の奥には、一番上の跳び箱二つ分くらいの大きさの岩があった。

着物を着たおじいさんが白いひげを撫でながら、その岩の上に座っていた。向こうもこちらに気付いて、手招きしている。しかし、よく見ると、岩の前には、しめ縄が掛けられており、またいで入ったら罰が当たりそうだった。大吾が入

おじいさんは、「わしのこと、本当に知らんのか？」と聞いてきたが、大吾は笑って「知らなくい」と答えた。

大吾は「おじいさんの岩って、なんかへんなの！」といいながら、隣に座る。岩の前に置かれたお椀が目に入った。

「これは？ 何が入ってるの？」

「それは白酒シロキが入ってる。おぬしが飲むにはまだ早いものじゃ」

大吾はお椀を手を取っておいをかいでみた。シロキは、透明なお水じゃない、夜おとうさんが飲んでるもののようなツンツとしたにおいがした。大吾は思わず鼻をつまんで、お椀をおじいさんに渡す。

「くさい！」

「ほっほっほ。おぬしにはそうかもしれぬな」



おじいさんは、お椀を受け取って一口飲む。

「おじいさんには、いいにおいなのか？」

「うむ、よい香りじゃ」

おじいさんが答えると、大吾は「ええっ」と舌を出した。「ほく、アイスクリームのほうがいい」

「あいすくりいむ？」

「うん！ 甘くて冷たくてとってもおいしいやつ！」

「ほう！ それはうまそうじゃの」

おじいさんは笑いながら、「そういえば、おぬしの名は？」と聞いてきた。大吾は「だいごだよ」と答え、空いた場所に座った。後ろに両手をついてもたれる。

「わしは、九州大宰府へ赴く途中、この地に寄つてな。そこで出会った農民が、麦飯と甘酒を振舞ってくれてのう。お札に袖を渡したのじゃ。それから、この地に御袖天満宮が建てられた。今は、毎年こうして酒を供えてくれておる」

そうして、おじいさんは大吾の方をちらっと見て、「しかし、このわしを知らぬとは。おぬしは、もつと歴史を学ぶ必要があるのう」という。

それを聞いて、大吾はむっとした。続いて、「どうして勉強しなくちゃいけないの？」と問いてみた。

「歴史なんて将来何の役に立つの？ 昔のこと知らなかったって、別に困らないよ」

すると、おじいさんにはつこりと微笑んで答えた。

「そんなことはない。歴史は、どうしてそれが起こったのか、理由を突き止める手助けをしてくれる」

例えば、といいながらおじいさんは髭をなでた。「おぬしが友人と喧嘩をしたでしょう。仲直りするためには、何をするとよいかかな？」

喧嘩。

その言葉に、大吾は昇のことが頭に浮かんだ。

今までにも喧嘩をしたことはあったし、大吾はすぐに「あやまる」と答える。おじいさんは、「そうじゃ」とうなずいた。

「では、次に、喧嘩しないためにはどうすればよいか。わかるかの？」

そこで大吾は、言葉を詰まらせた。分からない。謝って、許してくれたらそれで終わりじゃないのか。苦し紛れに大吾は「気を付ける」といつてみたが、すぐにおじいさんから「何を、どう気を付けるのか」と返ってくる。

あのとき昇が走って帰ってしまい、どうしてあんなに怒ったのかわからないままだ。図工の授業でした一緒にお祭りに行くという約束もうやむやになったので、おばあちゃんと来てしまったのだ。大吾は、答えを出せずに黙り込んでしまった。それを見たおじいさんは、大吾の頭にポンツと手を乗せていった。

「次、喧嘩しないようにするには、どうして喧嘩

してしまったのか、理由を知る。そして、同じことを繰り返さないようにする」

歴史とはそういうものじゃ。

大吾の頭は、昇のことでいっぱいになった。そのとき、小路のほうから「大吾！」と呼ばれた。

振り向くと、入り口でおばあちゃんが息を切らして立っていた。どうやら、大吾を探していたらしい。おばあちゃんは岩に座る大吾を見つけるなり、

「そこは、座っちゃいかんじゃろ！」

早くおりなさい！ と、大吾を手招く。

「え、だって」

おじいさんがいいっていったから。

そう言おうと大吾は立ち上がって隣を見たが、そこにあのおじいさんはいなかった。

大吾がおばあちゃんとともに小路を出ると、来たときと打って変わって大勢の人が天満宮へ向

かっていた。いつの間にか日が暮れ、提灯の明かりがついている。先ほど、おじいさんに会って話をしたことも信じてもらえず、「罰当たりなことして！」と、アイスクリームはなしになってしまったが、そのままお祭りに向かうことになった。

天神さんへ着くと、境内は福引券を持った人が列をなしていた。おばあちゃんから券をもらって大吾も並ぼうとしたとき、列の最後の方で福引券を握りしめたまま並ばずに立っている子がいた。

「あ、昇」

来てくれたんだ。

昇を見つめるなり、大吾はおばあちゃんの手を放して走った。

「こりゃ、大吾！」

おばあちゃんの声が耳に届いたのか、昇がこちらを向いた。

「大ちゃん？」

昇は走ってくる大吾に一瞬驚いたが、次には泣

きそうな顔になった。

大吾は昇のところまでいくと、すぐに「昨日はごめん」と謝った。

おじいさんと話して、昇が怒った理由を、大吾は自分なりに考えた。そこで、思い出したのは、昇のおかあさんがつくってくれたナフキン袋のことだった。下校中、昇が嬉しそうに、おかあさんがつくってくれたと話していた。

「昨日、昇のおかあさんが作った袋くしゃくしゃにしたから怒ったんだよね？ 気づかなくてごめん！」

大吾の出した答え。それに対して、昇は首を横に振った。

「そのことじゃないよ」

「えっ」

「折り鶴」

昇は続けていう。

「ナフキン袋に入れてたんだ。やつとできたか

ら、おかあさんにあげたかった」

つばさを閉じて入れていたため、折り鶴は無事だった。しかし、それにほっとしたのもつかの間、昇は一方的に怒って帰ってしまったことを後悔していたようだった。

「おれのほうこそ、ごめん」と、昇は頭を下げ謝った。

それから、にっこりと笑って、「ねえ、大ちゃん。いっしょに並ぼう？」というと、大吾は「うん！」とうなずいた。

列に並んで自分の番を待つ間、昇がいった。

「折り鶴をあげてから、おかあさんの体調がよくなったんだ」

「なら、もっとよくなるように、僕が折り方教えてあげる！」

大吾がいうと、昇は、笑いながら「おねがい」と返事をした。

福引で二人があてたのは、千枚入りの折り紙だった。 ㊦



ブ
ラ
イ
ト
・
マ
リ
ン
・
ブ
ル
ー

ブライト・ マリオン・ブルー

森田彩音

絵：小藤由愛

ぼくには、好きな人がいる。
とびきり可愛くて綺麗な女の子だ。

騒がしい蝉の声が耳をふさぐ。照りつける太陽から少しでも逃れたくて、建物の影をたどるように階段を下りているけれど、影が途切れると火傷しそうに足の裏が熱い。石段の照り返しが、目の奥をちくんと刺す。ときおり人とすれ違っておこ

る柔らかい風が、気休めとはいえ心地よく感じられる。ここではいろいろな人と出会う。いつも声をかけてくれるおばあちゃん。賑やかな若い女の子のグループ。首からカメラをさげた、おしゃれなカップル。すれ違うたび、みんな違うにおいがある。

「わあ、見て。可愛い」
こんにちは。暑いね。



「この暑さじゃこの子たちも大変だね」

本当だよ。足の裏に焦げ目つきそうだし、ひげなんて端っこからちりちりに燃えちやいそうなんだから。でも、ぼく、行かなきゃならないところがあるの。

「あ、行っちゃった」

ごめんね、急いでるんだ。楽しんでね。尾道、いいところだから。

ぼくは、ここを気に入っている。この町は、家族みたい。みんなそれぞれ違うにおいだけど、共通するのは、みんなどこか暖かいにおいがするということ。

でも、今からぼくが会いたい人は。

春から、たくさんの彼女を見た。

彼女は高校というところに通っているらしい。自転車通学で、この石段をずっと下った商店街の先にある海岸通りが通学路。同じ年くらいの高校

そうではなかった。むしろ、ちょっと嬉しそうな顔をしていた。

彼女がときどき、後ろから自転車で追い越す友達に声をかけられているのを見る。「また明日ね」「ばいばいー」と軽く叫ぶ友達に、彼女は少しきまり悪そうに「あ、うん……」とだけ返すのだった。くるくる表情の変わる彼女の方が馴染みがあるぼくは、最初そのことに少しびっくりしたけれど、同時にちょっとした優越感みたいなものも感じていた。ぼくだけが知っている、ぼくの好きな女の子のひみつ。彼女のことを思い浮かべるときはいつも、うんと甘くて、ちょっとだけぴりつとしたにおいがする。

ひよい、と縁石に飛び乗る。ここが定位置。行儀よく前足を閉じて、しっぽをくるんと巻きつけて彼女を待つ。今か今かときどきしているこの時間は、どんなに暑くても気にならない。

けれど今日、彼女はいつまでたっても来な

生がひとしきり通り過ぎた後、ペダルを漕ぐ彼女の姿が現れる。ポニーテールを風になびかせて、膝にかかる紺の折スカートの裾をたまに手で押さえながら、彼女は現れる。ポニーテールの結び目には、決まって青いリボンが結ばれている。

ある日は、何か楽しい表情だった。必死に真顔を装っていたけれど、明らかに口角が上がっていて、ときどきハッとしたように唇を結んでいた。いつもはしない立ち漕ぎなんかもぐんぐんしちゃって、いいことでもあったのかな。

ある日は、こっちが心配になるくらいうわの空だった。信号が青になるのも気づかずに、セーラー服の襟も変なふうに折れていた。頭のリボンも蝶々結びがほじめて、ただの固結びになっていた。

ある日は夕方から雨が降り、彼女はぐっしょりと濡れていた。ポニーテールから水が滴って、胸元のスカートもべたんこになって、でも彼女は嫌

かった。

どうしたのかな。

日が暮れかけるこの時間は、日の長い真夏だとそれなりに遅い。

何かあったのかな。

「胸騒ぎ」とか、「一抹の不安」とかって、こういうことを言うのかな。

落ち着かずきよろきよろと周りを見渡すと、通りを挟んだ向かいの、白いパラソルの下に停められた自転車が目に入った。

もしや、と思ったときには、もう縁石を飛び降りて駆け出していた。

十四日元町棧橋、と書かれたパネルを見上げながら、おそろおそろ近づく。赤い公衆電話ボックスの陰から顔を出して、彼女の姿を探す。

いない？

海辺にあるこの場所には、青と白の parasol がついたテーブルとベンチがいくつか置かれている。そのどれにも彼女の姿はなかった。誰もいない。自転車はここにあるのに。

燃えるような太陽は、重たげに向島のむこうに隠れようとしている。海が、はちみつを溶かしたような色に染まっている。待って。

夕日が沈んでしまえばもう彼女とはずっと会えないような、なぜかそんな気持ちに襲われて、たまたまぼくは飛び出した。

いちばん海に近いベンチの向こう側、目に入ったのは見慣れたポニーテール。それから、セーラー服の襟から出た、三角形の紺色のスカーフ。ベンチに隠れていて、見つけれなかったんだ。ひどく久しぶりのような懐かしい気持ちになって、ゆっくり歩み寄る。けれど、彼女の隣まで来て、ぴたりと足が止まった。彼女は、俯い



て、細い肩を震わせて、唇を噛んでいた。ウッドデッキに腰掛けて海の方へ足を投げ出す彼女は、僕に気づかない。

どうしたの。言いたいのに出なくて、しばらくそのまま立ち尽くしていた。そっとしておいた方がいいのかな。あまりに弱々しい彼女は、そのままでは夕焼けに飲み込まれてしまいそうで、ぼくは彼女のスカートの端っこに、遠慮がちにちょこんと前足を乗せた。それしか出来なかった。少し間がある。彼女がぎゅっと噛んでいた唇を解き、こちらを見る。泣いてはいなかった。

「ねこ……？」
「そうだよ。君のことが好きな猫。どうしたの。何があったの。」

正面からきちんと彼女を見たのは初めてだ。表情はこわばっていて、唇には跡が残って痛々しかったけれど、やっぱり彼女は綺麗だった。長い

睫毛が小刻みに震えている。

「……おいで」

わずかにためらったあと、掠れた声で小さく呟き、膝枕をするようにぼくを引き寄せた。穏やかな彼女の手が、頭から背中にかけてをゆっくりゆっくり撫でる。

「へへ、……可愛いね」

ねえ、どうしたの。どうして君はそんな顔してるの。そんなに辛そうなのに、どうしてぼくに優しくするの。

彼女は、ぼくを撫で続ける。あたりは静かで、防波堤に跳ねる波の音が妙に大きく感じられた。それから彼女は、何も言わない。

ずいぶん長いこと、そうしていた気がする。

日はとうに落ちて、西日の残っていた熱気の混じる夜になっていた。海は、ペンキで塗ったように真っ黒だ。

ふと、ぼくを撫でる彼女の手が止まった。見上

げると、彼女は今にも泣きだしそうな顔をして、また、唇を強く噛んでいる。

ぼくは彼女の手をすり抜けて膝の上に立ち上がり、彼女の唇にめいめいっばい手を伸ばした。暖かい感触。

泣いていいんだよ。

彼女は驚いたように目を見開いた。目の端にじんわりと涙が浮かんだ。

「う……」

泣いていいんだよ。

「うわああああ」

彼女はぼくをぎゅっと胸に抱いて、顔をぐしゃぐしゃにして、小さな子どもみたいに泣いている。暖かい涙がとめどなくぼくの背中に落ちる。手の甲で何度も何度も涙をぬぐって、嗚咽して、また涙をこぼして。

その時、きらりと小さな光が灯った。暗闇の中にたったひとつ、一番星のように。やがてその光

の隣にもうひとつ光が灯り、その隣にまた光がともり、あたりはみるみるうちに光の粒でいっぱいになった。それらは海に映り、星屑をまいたようにきらめき、揺らめいている。

実際には星ではなく、島に架かる橋や海を渡る船の電灯がついたのだけど、ぼくはその光景に息をのんだ。星あかりのようなくつもの光が、彼女の涙を照らしている。

ぼくは彼女の膝からそっと降りて、斜め後ろに座る。彼女はすっと立ち上がって、遠くを見つめた。まっすぐなまなざし。濡れたまつげがきらりと光る。もう大丈夫。口元には笑みを浮かべていて、肩の力も抜けていた。すつきりとした横顔だった。

綺麗だな。

自転車でぼくの前を通る彼女を見ているときとも、思い詰めていたときの彼女を見つめていたときとも少し違う、不思議な感覚。

目を奪われていると、彼女が視線に気が付いたように、くると振り返った。花が咲くみたいに制服のスカートが膨らむ。ポニーテールが揺れて、にっこり笑う。

「ありがとう」

ぼくじゃない、君を変えたのは君自身だよ。

「ねえ、もう一回触ってもいい？」

「いいよ。」

どきどきして、ちょっと体が硬くなる。ちゃんと毛並み、綺麗かな。さっきまで普通に撫でられていたのが嘘みたいに、心配な気持ちになる。「なあんて、こんなふうになら私に猫に話しかけてるのだから、らしくないんだけどね」

耳の後ろあたりをこちょこちょと触りながら、へへ、と笑う彼女は可笑しそうだ。

「ふわふわだね。可愛い顔しちゃって、さては男の子の猫ちゃんに大人気なんじゃないの？」

うん？ 待って、ぼく男の子だよ。

「そうだ。お礼に、もっと可愛くしてあげる」
そう言って彼女は自分の頭に手を伸ばした。

「潮風で、ちょっと絡んじゃったなあ」

ポニーテールを手で軽く梳いたあと、結び目の青いリボンを解いた。ぼさりと髪の毛が下りて、シャンプーの甘い香りと潮の香りが混じり、ぼくを襲う。ちよつとくらくらした。

「ほら」

ぼくのしつぽにリボンを結ぶ。

「赤とかピンクの方が女の子らしいんだけど……きみは海が似合うし、こっちの方がいいね」
嬉しいけどぼく、男の子だよ。お願い。気づいて。

複雑な気持ち。満足そうに君が目を細めるから、まあいいやって思ってしまうぼくは単純かな。でもね、ぼくなんかより海が似合うのは、君の方だよ。君は、真夏の太陽の何倍も眩しい。君の笑顔は、誰よりも可愛い。



「きみ、きっとこのあたりで暮らしてるんだよね。また会えるかな」

会いに来るよ。明日も。

ぼくには、好きな人がいる。

とびきり可愛くて綺麗な女の子だ。☺

かんざし灯籠伝説

かんざし 灯籠伝説

森山美琴

絵…上杉理紗

尾道の大学に通うため、親元を離れ尾道暮らしを始めて最初の夏がやってきた。ここに来たばかりの頃は慣れない土地に右往左往したもののだが、半年も経つと見知った場所も増えてくるもので、かなりこの町に慣れてきたのではないだろうか。そんな考えも虚しく、私は現在見知らぬ道の真ん中で迷子になっていた。

「……なんで地図をちゃんと確認しなかったのか

大まかに説明を受けた。説明を聞いただけで分かった気になってしまった私は、下調べもろくにせず楽観的な気持ちで今日に臨んでしまったのだ。その結果がこの迷子である。

しかし迷ったものは仕方がないので、友人が迎えに来てくれることに期待しつつ携帯にメッセージを残してから、再びライブハウスに繋がる道を探す。尾道本通り商店街を抜けてからはアーケードが無くなってしまっているので、頭上から勢いよく照りつける太陽と、アスファルトの照り返しによりムワツと上り立つ熱を直に受けることになってしまふ。初のライブ参加ということで、軽い化粧と、久しぶりにお気に入りの髪留めを鏡台から探し出して付けてみたのだが、この暑さの中を動き回っているためか先ほどから汗がとめどなく流れている。恐らく化粧は台無しになっているに違いない。歩きながら道をさまようこと二十分。流石に休憩したほうがいいかなと思ひ、どこか涼める

私は」自分に呆れてつい漏れた一言が、騒がしい蝉たちの声に吸い込まれ消えていった。

どうして迷子になってしまったのか。遡ること昨日の夜。大学の友人にライブへ来ないかと誘われたのだ。しかしそのライブハウスというのが少し分かりにくい場所にあるようで、友人から、尾道本通り商店街を抜けた先の細く入り組んだ道をいくつか抜けなければいけない場所にあるのだと

場所はないかとキョロキョロ辺りを見回すと、民家を抜けた先の開けた場所に神社を発見したためそこへ向かった。神社の近くまで行くと、気になるものが目に入ってきた。これは一体なんだろうと不思議に思っていると、近くに立っていた看板からそれが「かんざし灯籠」という灯籠であることがわかった。看板の続きに、この灯籠についての説明書きが書かれているようだったが少し長かった。その時の私には読む気は起きなかった。神社の入り口に立っている狛犬の像の辺りで、涼みながら整えた髪を手鏡でチェックしていると、頭の後ろにつけていた物が消えていることに気がついた。

「あれ！ 髪留めがない！」

「どこかに落としたのかな……。神社に着く前にはあったと思うんだけどな……」

ブツブツとつぶやきながら辺りを探す。しかし髪留めはどこにも見当たらない。神社に着く前に



落としたのかと思ひ踵を返して戻ろうとすると、先ほどポケットに収めたスマートフォンから私の現在の心境とは似つかわしくない陽気なサンバの曲が流れてくる。この着信音はライブに誘ってくれた友人の設定着信音であったため急いで電話に出た。

「もしもし」

「伝言聞いたよ！ だから地図をよく確認しときなさいよって言ったのにく！ 出番までまだ時間あるけえ今から迎え行く！ 今どこにおるんア
ンタ」

「えーっと」

そういうえばここはどこなんだったかな。名前を確認するために神社の鳥居に目を向けるとかすかに『八坂神社』という文字が読み取れた。

「八坂神社って書いてある」

「あー。そこじゃったら曲がらんといけん道通り過ぎとるわ。まあそんなに遠くなくてよかった。

すぐ行くからそ動きなさんなよ！」

早口にまくし立てたかと思うと勢いよく電話が切れた。それから少しして、友人が迎えに来てくれた。無くしてしまった髪留めをまだ探したいとも思っただが、わざわざ迎えに来てくれた友人を待たせるのも気が引けてしまう。髪留めを探するのはとりあえずライブが終わってからにしようと考えた。幸い神社の辺りはひと気が少なく、髪留めも華美な装飾があらわれている訳ではないバレッタのようなものだったので、誰か人にとられる心配はまずないだろうという確信も後押し、とりあえずこの場を離れてライブハウスへと移動をすることに決めた。ライブハウスまでの道中は意気衝天と友人ライブの話で盛り上がり、ライブが始まってからも、終始場の雰囲気と一体化し大いに楽しんだ。その時の私は、無くした髪留めのことなんて気にも留めていなかった。

ライブも終わり友人に感謝を告げてから、私は

再び髪留めを探すために八坂神社へと向かった。

この時すでに時計は午後六時を回っているが、空はほんのりオレンジがかっている。この明るさなら髪留めを探すことも可能だと思ひ高揚した気分のまま急ぎ足で進んだ。

髪留めを無くした時はかなり焦っていたことと不安だったことで見落としたのではないか。時間を置いたら案外すぐ見つかるのではないかという思いも虚しく、神社に着いてから一時間ほど髪留めを探し歩いたが一向に見つからない。日も落ちてしまい、空はオレンジ色から紫がかった藍色に突入していた。辺りの薄暗さにひと気のなさ、そして近くの民家からだようご飯の匂いが寂しさをより一層際立たせ、私を帰りにくさせた。しかし私は髪留めを諦めきれなかった。ずっと鏡台にしまっていて忘れていたけれど、無くした髪留めは私にとって大切なものだ。本当に大切なものなのだ。それなのにどうして、どうして。

「どうしてそのままライブに行っちゃったんだらう……。楽しんでる場合じゃなかったのに」

ポツリと声漏れ、後悔が押し寄せるのと同時に、涙が出そうになった。この後をどうするか決めかねていると、カランコロンと誰かの足音がふと耳に入ってきた。手元のスマートフォンを見ると時刻はもうすぐ八時になるうとしており、こんな時間に神社にやってくる人に違和感を持った。

かなり暗くなつた辺りの中、音のする方へ目を凝らして見ると、それは着物姿の女性だった。いまだき着物を着て下駄をはいているとは風流な人なのだろうなどどうでもいいことを考えていると、女性はなぜか私に向かって近づいてきた。つい女性の方をじっと見ていると、それまで俯きがちだった女性が急に顔を上げるので視線がバチリと合ってしまった。驚きのあまり小さな悲鳴をあげてしまった。

「……」

「……」

女性は何も喋ろうとしないため、私も第一声を決めかねている。気まずい沈黙の中、ふと彼女が右手をこちらに少し差し出していることに気がついた。何かを渡そうとしているのだろうか。訳も分からず何となく彼女の手の前に私の左手を差し出すと、そっと何かを手に握らされた。一言もなしに急に手を触られたことや彼女の手が夏場にしてはかなり冷たかったことに驚きながらも恐る恐る手を開ける。握らされたものは……私の髪留めだった。

「えっ!? あの……!!」

驚いて声をあげた私をよそに、いつの間にか女性の姿は消えていた。その場に立ち尽くしていると、夜になり涼しくなった風が葉を揺らす音に紛れて声はどこからともなく聞こえた。

「大切なかんざし。お返しいたします。お返しいたします。思いの込められたまばゆいかんざし。」

お返しいたします」

そして私は今、再び八坂神社を訪れている。何者かから髪留めを返してもらった後、私は突然恐ろしくなり一目散に家に逃げ帰ってしまった。しかし昨日の出来事がどうしても気になってしまい今こうしている訳だ。かなり朝の早い時間に来たため、昨日の夜に出会った女性の姿が無いのはもちろんのこと、周りには人っ子一人いない。別段様子の変わらない神社を眺めていると、昨日は特に注意しなかった灯籠の前に掲げている看板が気になった。そういえばこの看板には何が書かれていたのだったかな。好奇心から灯籠の前に近づいてみる。

「えっと、なになに、かんざし灯籠伝説……?」

そこには、「かんざし灯籠」についての逸話を書かれていた。江戸の末にあった、芝居小屋で働いていたお茶子と若旦那の恋。しかし、かんざし



をさしていないと難癖をつけられ、若旦那の親から結婚を許されなかったお茶子は井戸へと身を投げ、「かんざし下さい」と訴え続ける幽霊になつてしまった。そのお茶子の幽霊を慰めるための灯籠がこの「かんざし灯籠」だ。

昨日の不思議な出来事の正体にたどり着けた。つまりあれは、かんざしを欲したゆえに私の髪留めを求めた行動だったのだ。しかし、彼女は どうして私に髪留めを返してくれたのだろうか。

灯籠の前で手を合わせて昨日の女性のことを考える。彼女はもしかすると、私が髪留めの大切さに再び気がついたことよって私の元に返してくれたのかもしれない。あの女性には感謝をしないとけない。彼女のおかげで、髪留めをもらった時のあの喜びを思い出し、私にとって大切なものだ と再確認させてくれたのだから。

再びかんざし灯籠に向け手を合わせた後に、何を話そうか考えてからスマートフォンをポケット

から取り出した。コール明けに聞こえてきた懐かしい彼の声に耳を傾けながら、私は八坂神社を後にした。 ㊦

玲瓏^{れいろう}として

玲瓏として

森川 泰樹

絵…小西 美幸

気持ちのいいさらりとした風と、ほんのり紅く染まっている葉っぱが夏の終わりを告げている。今日は休日ということもあり、広場は観光客で賑わっていた。若者や子ども連れの家族、お年寄りや外国人観光客など数え切れないほどの人々が往き来している。その人混みを肩ですり抜け、レモン味のソフトクリームを両手に持ちながら、彼はベンチに座っている私の元へ歩いてきた。

「ありがとう。今日は涼しくていいね」
「そうだね。何してたの？」
「人間観察」
「相変わらずだね」
そう言っただけながら、彼は私の隣に腰掛ける。二人でこの千光寺公園を訪れるのは二度目。一度目と違うのは、制服ではないこと、平日ではな

いこと、そして、彼がもう私の彼ではないことだ。

「痛っ……」

ソフトクリームを食べていた彼が急にこめかみを押さえる。

「ちょっと、大丈夫？」

「急に食べ過ぎただけだよ、ありがとう」

「気をつけてよね……」

私たちは小さな頃からお互いのことを知っていた。幼稚園から高校まで、ずっと一緒だった。いわゆる幼なじみというやつだ。

高校二年生の春、私は彼の交際の申し出をその場ですぐに受け入れた。

約一年の交際を経て、別れ話を彼が切り出したとき、私にはわかった。もうこれは何を言っても

無理だと。私は彼のことを理解しすぎていたのだ。高校を卒業し、私は地元の専門学校へ、彼は九州の四年制大学へと進学した。私は人生で初めて、彼がいない街で生活することとなった。その二年間、気づけば彼の後ろ姿ばかりを探していた。いるはずもないのに。

専門学校を卒業し、就職して数年。

ある日の夜。携帯電話に着信があった。

表示された名前は、彼の名前だった。

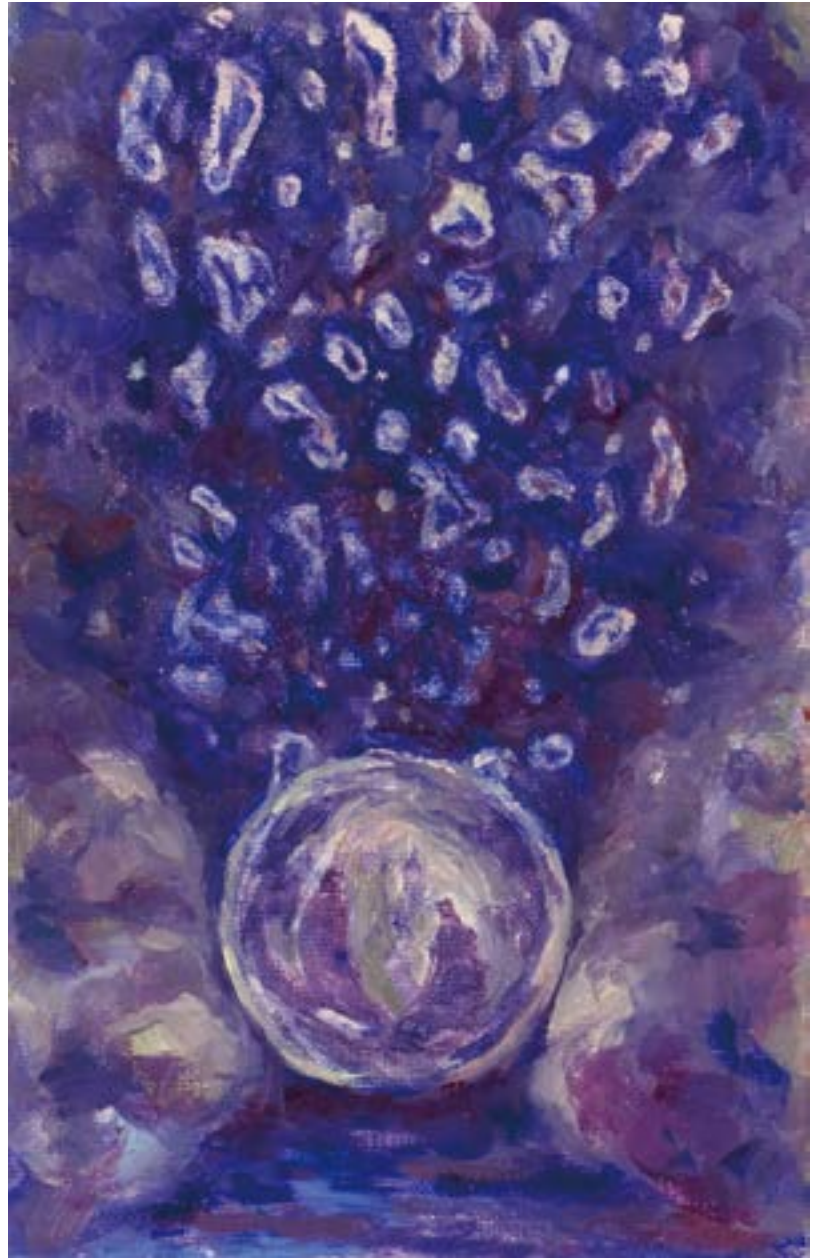
ソフトクリームを食べ終わり、背伸びをしている彼に一応尋ねてみる。

「それで？ 何か思い出した？」

「ごめん、やっぱり思い出せなかったや」

「そっか……」

彼が申し訳なさそうに俯く。



仕方ないよねと自分に言い聞かせながらも少し落ち込んでしまう。わたしは今でも鮮明に覚えている。このベンチで、ラムネを一气飲みしてむせた君の背中をさすったこと。ビー玉の取り出し方がわからなくて困っていた君。そのときのビー玉は、今でもまだ宝箱の中に入っている。

「じゃあ、思い出せるようにもっといういろいろ回ってみよう」

「そうだね、ありがとう」

「次は展望台に上ってみようか」

他の観光客にぶつからないように、狭いらせん階段をゆっくり上がっていく。広い場所に出ると、真っ先に目に入るのは日光に反射して、きらきら輝いている海。そして千光寺山に生い茂る葉の緑と尾道駅周辺の高いビルや駅前の広場。左手には尾道大橋、右手には尾道市街の景色が見え

る。渡船が尾道水道を渡って、向島へと向かっている。頬をなでる柔らかな風が心地いい。手すりの近くには設置型の双眼鏡がある。彼はそれを見るやいなや、駆けだしてのぞき込んだ。

「何も見えないんだけど、壊れてるんじゃないの？」

そこで私が硬貨を入れる。

「あつ……見えた」

「お金入れないと見えないんだよ」

「そうだったのか……ありがとう」

ぼつが悪そうに彼はおでこをかく。困ったときの彼の癖。変わってない。

「どう？ 何か見える？」

「船が見えるよ。船の名前や乗っている人まで。駅前の横断歩道を渡っている人もはっきり見える。商店街に向かっているのかなあ」

彼はやはり覚えていない。このやりとりが二度目だということを。



周りを見まわすと、日曜だというのに制服姿の女の子がひとりで手すりにもたれかかって町並みを眺めていた。誰かと待ち合わせかな。そう思った矢先、同じく制服姿の男の子が彼女の元へと走ってきた。遅れてごめんね、と男の子。今来たところだから大丈夫だよ、と女の子。少なくとも私たちが来るよりは前からいただろうに。男の子は安心したように、手をつなぎ、二人は広場へと降りていった。すてきななあ。いいなあ。

あらゆる出来事が、当時の記憶を呼び起こす。それでも彼は――。

「すげえ綺麗だったよ」

一硬貨ぶんの時間が切れたのか、彼はのぞき込むのをやめて、私の横で町並みを眺めていた。

「これが、私たちが生まれ育った町、尾道。どう？」

「いい町だね。ハルも見てみなよ」

下を見ると、さっきの二人がベンチに座って笑い合っている。

「ほんとうだね。すごく、綺麗」

階段を再び降りて、広場に戻る。すると彼が「ここに行こう」とパンフレットの地図を指した。そこは、神代桜が咲く場所。私が初めて、彼とキスした場所だった。

高校三年生の春休み、私たちは千光寺を訪れた。春期講習の最終日、たまっていたストレスを発散するために二人で遊ぼうと校門前で待ち合わ

せをしていた。約束するのはいいものの、どこに行くかはなかなか決まらない、というのがいつもの流れだったが、彼が珍しく千光寺に行きたいと言いつ出した。特段行きたいところもなかったため、二つ返事でOKした。

二人で階段を駆け上がり、汗だくになりながらベンチに座ってラムネを飲んだ。展望台に上った。夕暮れに染まる尾道の町並みを眺めながら、いろんな話をした。テストのこと、家族のこと、進路のこと、そして私たちのこと。

どれもが今となつてはかけがえのない思い出。またいつか来ようね、と指切りをした。

そして最後に向かったのが、今、私たちが目指している場所だった。

展望台のある出会いの広場を抜け、坂を下りふれあい広場を過ぎた先。アーチがかかっている道を進んでいくと神代桜の咲く広場がある。山梨に

あるお寺で二千年近く花を咲かせてきた桜の木がこのように言われているらしい。その子孫樹が、千光寺公園にも植えられている。一面に絨毯のように草が生え、その一番奥にぼつりと、木製の屋根とベンチがある。少し展望台から離れたからか、あたりに人影はなく、聞こえるのは風に揺られる木々の音と、鳥の囀り^{さえず}。まるでその空間だけ、世界から取り残されているようだと思っ

た。
二人で来た時はちょうど桜が満開だった。広場の周りを中心にして、四、五本ほど。そして、ベンチの正面にまだ私の身長にも届かないほどの、若木が一つ。オレンジ色の夕日を背景に、時折、花びらを散らしていた。柔らかく暖かい光が、私たちと木々を優しく包んでいた。アキはずっと写真を撮って、それを私が眺めていた。二人で撮った写真は、確か一枚だけ。数少ない、宝物だった。

二人で、隣どうしで、ベンチに座る。さつきよりも、すごくすごく緊張しているのが自分でもわかる。彼は何も言わない。私も何も言えない。そんな間が三分くらい続いた後、彼が呟いた。「前ここに来たときは高校三年生の時、つて言ってたっけ？」

「そうだよ。あのときは制服だったんだから」
「制服か……。何年前になるのかな」

「あれから十年たったよ。アキは全然変わってない」

「そうなの？ 自分じゃわからないなあ」

「それはそうでしょうね」

二人で笑い合う。

「あれから、いろんな事があったなあ。私たちが会うのも、アキが大学を卒業して以来だから六年ぶりになるのかしら」

「そんなに前のことなの？ てつきり頻繁に会ってるものかと思っていたよ」



そんなに会えていたらどんなに良かったか。

「お互い社会人だし仕事もあるからね。あの夜、おばさんから電話がかかってきたときびっくりしたよ」

「それは申し訳ない」

「本気で心配したんだからね。私泣きながら駆けつけたんだから」

「ごめんね」

「もういいよ。生きていてくれただけで良かった。それで、結局何をどれくらい覚えてるの？」

目を覚ました時、見えたのは白い天井、母さんの顔、おそらく医者と思われる人。ひどく頭が痛い。体がだるい。



「あなたの名前を教えてください」

「村上秋葉」

「生年月日はわかりますか」

「一九八九年九月八日」

「ここに居る人は誰かわかりますか」

「母さん」

「秋葉くん、君は、なんでここに居るかわかりますか」

「何でここに居るのか……。あれ、俺は何でここに居るんだ？ わからない。思い出せない。思い出そうとするとひどく頭が痛む。」

「あなたの職場はどこですか」

何も思い出せない。後から聞いた話だが、検査の結果、交通事故で頭を強く打っていてそれが影響したらしいとわかった。

「秋葉の記憶を取り戻すためにはどうしたら良いですか……」

「記憶というものは点ではなく、線で存在してい

ます。記憶どうしは密接に繋がっていて、あることを思い出すと他のことも思い出せる、と言う事例が数多く存在しています。一つの木の枝を揺らしたら他の枝も揺れるように。なにか小さなきっかけさえあれば記憶を取り戻すことはおおいに可能です。そのためには親交の深かった人と、昔の思い出や出来事を話すことが効果的だと言われています」

「秋葉くん、誰か仲のいい人、会いたい人はいるかな」

「よく私のこと覚えてたよね」

「忘れるわけ無いじゃん」

顔が紅くなっているのが自分でもわかる。本当にうれしい。

「でも、ハルのこと全部覚えているわけじゃない

んだ。ずっと一緒にいたことは覚えているけど、
どんなことをしてきたのかはさっぱりで」

「高校の時のこと何か覚えている？」

「断片的には」

「……じゃあ、高三の時の体育祭、どの団が優勝
したのか覚えてる？」

「俺のおかげで逆転優勝したやつでしょ？ 覚えて
る覚えてる」

「何でそれは覚えてるのよ……。じゃあ担任の先
生の名前は？」

「わからない」

「クラスで一番かわいかったのは？」

「覚えてない」

「……じゃあ、私が付き合ってたひとは？」

「……覚えてない」

彼は、私と付き合っていたことを覚えていない。

「付き合ってた人いたんだ。どんな人だったの？」

「馬鹿で、おっちょこちょいで、一度決めたこと
は絶対に譲らないほど強情で……」

「おいおい悪口ばかりだな」

「だけど、いつも、どんなときもそばにいてくれ
て、笑わせてくれた」

「……」

「私ね、本当に好きだったんだ」

「別れは彼から？」

「うん。『お互いのため』だって。ずるいよね。」

受験でこれから忙しくなるから、なんて」

「なんてやつだ、そんなやつ別れて良かったん
じゃないか？」

「ふふっ、本当ね。そのときわたしね、諦め
ちゃったんだ。彼が頑固だって知ってたから。も
う無理かなって」

「……」

「ねえ、アキ。わたししたら良かったのか

な。もしアキだったら、どう思う？」

「えっ、俺だったら？」

「男子の一意見として聞かせてよ」

「そうだな……。俺だったら——反対して欲し
いかなあ」

今までこらえていた涙が、溢れた。

押さえられないどうしようもない感情をアキの
肩へとぶつける。

「痛っ、何でだよ」

「何ででも」

ほんと勝手すぎるよ。今のアキに言っても仕方
のないことではあるけれども。

でもきつと、そんなところも好きだったんだわ。

アキと別れた後、駅前広場の手すりにもたれか
かって、潮の流れと船をぼうっと眺めていた。

アキの記憶は結局戻らなかった。この事実にな
し、安堵している自分がある。記憶を取り戻すた
めと言う名目で、この先も側にいられるのだか
ら。もちろん、アキにとっては思い出したほうが
いいに決まっている。でも、もしアキが思い出し
たら私は、彼の隣にいられないかもしれない。も
し今のアキに好きな人がいたら——。

ああ、やっぱりまだ忘れられないんだなあ。我
ながらいつまで引きずっているのかしら。また、
じわりと涙がにじむ。次に会えるのはいつだろう
か。

たとえこの幸せが仮初めかりそめのものだとしてもかま
わない。願わくは、どうか——。



どこからともなく鈴虫の鳴き声が聞こえてくる。空には、銀色の丸い月が浮かんでいる。手すりにもたれかかるのを止め、ベンチに腰掛ける。少し肌寒い。まるでこころまで冷たい風が入り込んでくるようで、すこし寂しい。そうか、もう秋なんだ。

月に向かって手を伸ばす。その手は、空を切る。そして、また、涙がにじんだ。■

創作民話マップ

尾道草紙 13
創作民話マップ
マップ絵作成ー有岡穂香



●「玲瓏として」
千光寺公園



●「腰掛岩のおじいさん」
御袖天満宮



●「船買い岩霊・後日談」
福善寺



●「手紡ぎ」
宝土寺



「ブライト・マリン・ブルー」
十四日元町棧橋

●「かんざし灯籠伝説」
八坂神社



●「浄土寺の願掛け石」
浄土寺・本堂前

執筆後記

手紡ぎ



飯田 菜都紀

初めて尾道手しごと市を訪れた時、その賑やかさに驚きました。テントのお店をあつちこつちのぞいて、最後に見つけたのが糸紡ぎ体験です。作品と同じで小屋の中でやっていたのですが、テントのお店の活気ある様子とは裏腹に、まるで隠れ家のように、ひっそりゆっくり時間が流れていたのを覚えていいます。

糸になる前の、同系色のグラデーションに染められた原毛。紡いだ糸で編まれた、柔らかそうなベスト。回る糸車やコマのようなスピンドル。このお店の中で見たものです。この作品は、この時のことをヒントにして生まれました。楽しんでいただければ幸いです。

絵・三國 綾華

春のうららかなで、どこか陽気な空気の流れにわくわくする気持ちや、暖かな風心が落ち着くような、出会いの春に、惜しむ別れも付き物で、少しだけ寂しくてほんのり暖かい。そんな気持ちになる物語に挿絵を担当させて頂きました。春の晴れやかで明るく華やかで暖かい雰囲気は伝わるように努めました。

飴買い幽霊・後日談



谷口 萌花

福善寺を舞台にした民話を書かせていただきました。楽しく読んでいただけたら幸いです。

物語には愉快な龍神さまが登場しましたが、これは「過去にお寺の籠が動き出す話を書いた人がいる」という先生の言葉を思い出して付け足したものです。完全な後付けで、挿絵の方には申し訳ないです。

それから、逆立ちしている獅子がいるのって、福善寺さんだけじゃないんですね。屋根の端っこにあるモチーフにはいろいろパリエーションがあって、見ているとなかなかおもしろいです。神社仏閣を巡る時は、ぜひ注目してみてください。

絵・三石 京佳

可愛らしい獅子と、どこか抜けてる龍神様のやりとりが素敵で、これを描きたい！と思いました。今回挿絵をさせて頂けたことを嬉しく思います。水彩の柔らかい雰囲気、心温まるような、このお話に合えば、と思っております。素敵な機会、お話をありがとうございました。

浄土寺の願掛け石



光原 百合

浄土寺の願掛け石は、江戸時代の末に圧倒的な強さを誇った横綱・陣幕久五郎の奉納と伝えられています。尾道に遊びに来た大学の後輩たちをここに案内したとき、誰もが回してみようとしたが、重くてなかなか回らない。「最後はもう、『この石回れ！』としか願ってないよね」と誰かが言った言葉が、今回の話の着想となりました。

作中で紹介した小泉八雲の作品は「かけひき」という題名で、八雲の代表的な作品集『怪談』に収録されています。

絵・伊藤 敏治

今作のキアアイテム「願掛け石」。この石には様々な人の念が込められているに違いない。そして六人全員と繋がっているのは、唯一願掛け石だけだと思った。読み終えたとき、挿絵を描くときは、柔らかな懐かしさ、ひんやりとしたほの温かい欲のようなイメージがあった。今思えば、それは願掛け石の気持ちだったのかもしれない。

腰掛岩のおじいさん

藤村 ふゆか



高校生の頃から憧れていた『尾道草紙』に作品を載せることができ、本当に嬉しかったです！
菅公腰掛岩は、尾道育ちの母でも知らず、御袖天満宮へ続く階段の途中にある小路を通った場所でひっそりと祀られています。私が訪れたときは写真のように草がボーボー生えており、管理者の方がご高齢で手入れをされる方がいないとのことでした。尾道は神社やお寺で有名な歴史深い街ですが、それとはまた別に、ちよつとした街並みや場所の小さな歴史が積み重なって、趣ある街を形作っているのかなと思います。

絵・沖村明日香

この作品は主人公が歴史上の菅原道真に出会うことにより、一つ成長する物語でした。大切なことを教えてくれるので多くの人に読んでほしい作品です。イラストは私の普段の描きかただと、物語に馴染めないのではないかと、心配しましたが、藤村さんの不思議で優しい作品の世界観に、導くものになれてたら嬉しいですね。

ブライト・マリリン・ブルー

森田 彩音



尾道で自由きままに暮らす猫。この子たちの目に、この町はどう映っているんだろう？ 私たちをどんなふうに思っているんだろう？ そんな楽しい想像がこの物語になりました。
舞台となった棧橋は駅前から遠く、知っている人は少ないかもしれません。私のお気に入りの場所です。お弁当を食べ、のんびりして、うとうと眠ってしまったこともあるくらい。読んでくださった皆様には、お裾分けです。ぜひ足を運んでみてください！

絵・小藤由愛

森田さんの書かれた小説をもとに自分がより描きたい、読む方がより小説に引き込まれるようにしたいと考えながら制作を行いました。黒猫の尾道の女の子に対する恋を猫主体で描き、読者に女の子の表情を見せないことで先入観を持たせてしまわないようにしてみました。是非小説と一緒に挿絵も楽しんでいただければと思います。

かんざし灯籠伝説

森山 美琴



尾道のどこをモチーフにして話を作ろうか。悩みながら商店街を抜けた更に奥に見えてきたのが八坂神社でした。住宅やお店が並ぶ道の中佇む神社に足を踏み入れると、鳥居の横手に見えるのは大きな灯籠一つ。興味を惹かれてたどり着いたのが、「かんざし灯籠伝説」です。みなさんの心の隅で忘れかけていた大切な思い出が、この話で再び蘇ってもらえたら幸いです。

絵・上杉理紗

幽霊が出るのに心温まる、ちよつと不思議で素敵な「大切な髪留め」の挿絵を担当させて頂き、とても楽しく描くことができました。私は今回初めてかんざし灯籠を知りましたが、知っている方も作品を通してまた別の尾道の良さを発見してもらえば嬉しいです。

玲瓏として

森川 泰樹



とある漢詩に「玲瓏として秋月を望む」という言葉があります。この言葉には、恋人の心離れを憂い、秋の夜長に独りで月を見上げながら涙を流す、という情景が込められています。この言葉から、この物語が生まれました。主人公のハルは漢字で「波留」。本来移りゆく波がその場に留まってしまふ、動けなくなってしまう、という意味を込めて名付けました。
この物語の続きがどうなるかは、読んでくださった皆様委ねます。

絵・小西美幸

ゆつたりとした時間の中で蘇る淡く切ない二人の思い出の日々。その雰囲気をお話から感じつつ神代桜のある場所へ訪れ、想像を膨らませるといつもと違った見え方がしました。今回は、その時私が受けた印象を大切にしながら挿絵を描いています。尾道草紙で素晴らしい作品の挿絵を描かせて頂きありがとうございました。

尾道草紙バックナンバー

二〇〇五〜二〇一七

尾道草紙 1 創刊号

ことほぎのしろ／安部星子
神輿／澤村晋作
港の双子／天木俊
ポンポン岩と千の光／石田めぐみ
夏の終わりの幻想／菅亜未
雁木の夢／光原百合

表紙絵／新枝友里



尾道草紙 2

涙土手／市川敬太
盆通い／新屋法安
青い空／こはらさち
猫主様／三浦幸子
約束一つ／前田美穂
かくれん坊／水戸川奈緒
西国寺山の天狗／三木慶美
お稲荷さん／藤井優希
花吹雪／光原百合

表紙絵／高田知枝



別冊尾道草紙

尾道ベツチャー祭り二百年記念号

一宮神社のベツチャー祭り／田村禎英
帰省／光原百合
面の精たち／松尾るりえ
神輿の宙廻し／田村禎英
帰郷／光原百合

表紙写真／土本壽美



尾道草紙 3

仁王様と橋／岡村めぐ美
でべらおに／永田悠史
三つ首様と桜の木／宮本真里
阿犬吠犬／倉垣裕太
だごんさま／徳田翼
猫の花嫁／真野美樹
ええもんの竜／大場賀輝
オオクスノキサマ／松尾るりえ
福と石と猫と／黒田直樹
松になったとんび／横山奈津紀
尾道に住むふたりの神様の話／柴智寿恵
よいのなごりを／吉山結

表紙絵／中屋萌梨



尾道草紙 4

音の鳴る道／南優香
潮騒に誘われて／黒田直樹
今宵に白く／松田佐穂
語り夜／上田恵里奈
八幡参道／森元留衣
追いかけて鬼／衛藤清美
水売りと井戸／原田佳美
小さな狛犬／見分小百合
かんざし未練／中根香織
だんだんおはぎ／鎌倉勇弥

表紙絵／岡本晴夏



尾道草紙 5

ひるねでらのあまのじゃく／藤原遙香
桜色、春衣／藤田絢香
飴の音／塩田恵美
つらなり灯り／森田彩樹
おばあちゃんとおみちの空／長友美聡
玉の浦物語／鎌倉勇弥
花房さん／山本理紗
なごりとなりて／栢木希望

表紙絵／山室芳恵



尾道草紙 6

まいごみち／川端彩佳
河童とり綱／菊池麻衣子
八坂の狛犬／千葉菜美
逃げていく赤／佐藤麻衣
満天童子／中根香織
釣り人／橋原彩
狛犬と蹴球／武田真由子
夜桜招待券／鎌倉勇弥

表紙絵／中島有加



尾道草紙 7

ようおまいりのお地藏さん／大内雅代
桜井戸／山下美由紀
水猫／宮崎綾
玉の岩の話／張明珠
ある日の夕景／奥山春菜
灯火／藤尾史香
思い出まいご／新井志野

表紙絵／斎藤洋美



尾道草紙 8

青い鱗／竹内しおり
鳴龍天井／大川はるか
和菓子日和／片野望未
天邪鬼の悪戯／近藤一樹
ロープウェイおじさん／井上実優
ふたりおみこし／森岡ひかり
ぼんぼり屋／山根未来
神在の道／國貞絢子

表紙絵／喜來詩織



尾道草紙 9

雨音とてるてる坊主／川口俊平
あんないにん／志々田愛加
釣瓶落とし／香川莉歩子
不思議なバス／日名子紗綾
藍の手／竹口碧人
ふたりのひかり／玉冲望未
小さな願い事／山下紗季
ムーンライト・ピバップ／植村菜月

表紙絵／白石緑



尾道草紙 10

前田池のお地藏様／松浦明日香
あおい春、あかい夏／荻野奈々
水があふれます／高橋美佳
金魚の綿菓子／宇山祐那
最後の上映会／近藤那美
空鉦太鼓／荒谷茜
こいの龍王さま／野中翔
さかしまの海／久保増璃
くれのあい／尾形祥子
ゆき子のみち／小林彩香

表紙絵／吉田美結



尾道草紙 11

福石猫のいる町で／岡本明香里
神鎮小路のその先で／荒川遙
松と岩／末政百合絵
願いの町／小池夏美
弥生尽の約束／光原百合
神さまのいと／井田隆代
まぼろしのさかな／田端敏之

表紙絵／奥村彩
装幀・長谷川さや



尾道草紙12

さくら／篠原彩

井戸の中の猫／鈴木菜月

祭りの日の思い出／立坂鞠奈

良神社の狛犬／ト部文瑛綺

帆雨亭へようこそ。／田口悠

ある夜のお話／難波日向子

青葉時雨の降るころに／百武彩花

表紙Ⅱ 絵・サンガトウ

装幀・大山由貴



編集後記

尾道草紙10周年記念ボックス

十周年記念ですので、十年間に制作した尾道草紙すべてを納められるBOXを制作しました。尾道草紙創刊号から10号までと、別冊1冊を含めた11冊を納められるBOXとして、美術学科野見菜香さんによる尾道の風景のイラストをあしらっています。尾道草紙の中に入れたセット販売と、小物入れやインテリアとして使っていたいただけるようBOXのみの販売も行います。

奥村菜々実

美術学科 表紙・編集デザイン担当

今年の表紙は立体制作を船津さん、写真撮影を高岡さんに協力いただきながら制作しました。ほとんど手探り状態でスタートしたにも関わらず前向きに手伝ってくださいましたお二人には頭が上がりません。尾道草紙での仕事は学びとして受け止め、今後大いに生かしてゆこうと思います。

治居沙恵

美術学科 編集デザイン担当

今回、尾道草紙に初めて携わりました。文・挿絵・編集・デザイン……。多くの人と一緒にものを作るのは大変でしたが、いい経験をさせていただきました。制作メンバーにとお声がけしてくださりありがとうございました。楽しんでいただければ幸いです。

尾崎 瞳

美術学科 編集デザイン担当

読みやすさやページをめくるリズムを考えながらの編集作業は初めての体験で、わからないこともありましたがとても勉強になりました。想いの詰まった尾道草紙。多くの人に読んでいただけたら嬉しいです。

船津さくら

美術学科 表紙・立体

あつたかくて少し不思議な匂いの作品が多い今回の尾道草紙。表紙を飾れるなんて光栄です。

豊かな本になりますように。

高岡波留希

美術学科 表紙・写真

ヒトが何かを制作／表現するとき、必ず何かがそこで選ばれていて、同時に別の何かが排除されています。表現されたものと表現されなかったものの相補関係で、作品は成り立っているということです。写真はそれが読み解きやすいメディアなので、おもしろいです。

編集後記

藤村 ふゆか 日本文学科 編集担当

編集。憧れていた仕事に思わず「やりたい!」と手を挙げてしまいました。正直何をすればよいのか分かりませんでした。借越ながら尾道草紙の制作に携わることができて、とても嬉しかったです。本書から、尾道の魅力がより多くの方に届きますように。

森山 美琴 日本文学科 編集担当

本の制作で編集に携わったのは今回が初めてでした。ストーリーの順序を考えるだけでも緊張しましたが、良い経験になったと思っています。お手元の尾道草紙を読んで、尾道の魅力を更に感じて頂けたら幸いです。

野崎 眞澄 美術学科 教授

今号も昨年に引き続き、日本画、油画、デザインのコースの学生に挿画をお願いしました。日本文学科の学生による言葉の力に、美術学科の学生による想像力が加わって、物語の世界がさらに魅力的になりました。満開の桜にまつまれた新学期を迎えるこの時期に、尾道を舞台にした7つの不思議な物語が、読者の皆様にとって、まさに一期一会のストーリーとなることを祈りつつ、編集後記に代えさせていただきます。

世永 逸彦 美術学科 教授

私の研究室では3年生を中心に据えて、そこに2年生をひとり加え、3人チームを編成し、後輩へバトンを繋ぐカタチで進めています。「エディトリアル・デザイン」、その役割を言葉で説明することは、容易いですが、テキストの魅力と、絵の魅力の両方を読者へ届け、本全体の姿を提示する、その仕事は、なかなか奥が深いところがあります。その様な役割の学生も、この本の中で、機能していることを知っていただけたら幸いです。

この本へのご意見・ご感想はこちらにお寄せください。
onomichizoushi@yahoo.co.jp

監修 光原百合 尾道市立大学 芸術文化学部 日本文学科 (教授)
野崎眞澄 尾道市立大学 芸術文化学部 美術学科 (教授)
世永逸彦 尾道市立大学 芸術文化学部 美術学科 (教授)

発行 尾道市立大学 創作民話の会
〒722-8506 広島県尾道市久山田 1600 番地 2
電話 0848-22-8311 (代表)

発行日 平成 30 年 3 月 31 日
印刷 株式会社 村上オフセット印刷